

100年前の石碑から

やまね まさゆき
山根 正幸

●連合 企画局長

連合会館に接する東京メトロ新御茶ノ水駅。その出口エレベータの脇に「震災記念」と題された石碑が建っている。「大正十二年九月一日正午大震大火アリ焼失家屋三十萬死傷亦十萬ヲ超工實ニ古今未曾有ノ大惨事ナリ」で始まる碑文には、連合会館が建つ場所にかつてあった東京商工学校のことが書かれている。鉄筋コンクリート造りだったことで被害を免れたその校舎は、家を失った周辺住民の仮住まい、あるいは救援物資の配給拠点になるなど、助け合いの場となった。碑文の最後には、地域住民が謝意を込めてイチヨウ一株を植えたことが記されている。イチヨウは他の樹木より水分を多く含むことから、二度と大火の被害を繰り返したくない思いも込められていたのかもしれない。ただ、残念ながら今はそのイチヨウがどうなったのかはわからない。

今年で100年が経つ関東大震災では、建物倒壊、大火、津波などによる被害に加えて、発災から数日間は新聞が発行できず電話も不通となり、情報の空白による混乱も生じた。デマが疑心暗鬼を増幅させ、市民の自警団、そして警察や軍による殺傷事件が起き、多数の朝鮮人、中国人、日本人が犠牲となった。その中で労働運動家などが犠牲になった亀戸事件なども起きている。現代では情報通信手段も進化して防災・減災に活かされているが、それでもなお、阪

神・淡路、東日本、熊本の震災の時にもあったように、大災害時には誤った情報が広がりやすい。人々の生命・自由・権利を守るうえで、ハード面の対策だけでなく、個人・組織が情報を冷静に見極め行動していくことが問われている。

石碑の話に戻ると、この地に東京商工学校（現・埼玉工業大学）の校舎が出来たのは関東大震災の前年。その校舎は第二次大戦後に明治大学工学部が譲り受け、東京オリンピックの1965年まで使われたとのこと。その後、中央大学高校があった時代を経て1981年に総評会館が竣工し、現在の連合会館へと至っている。東日本大震災の際は、この場所から半年にわたって、連合のボランティア隊を乗せたバスが各地に向けて出発していた。ある参加者の方が「個人ボランティアだと、知らない土地で知らない人たちの中に飛び込んでいくのが不安だけど、連合の旗があると安心して参加できる」と話していたことに、連合運動のつながりが持つ力を実感したことを思い出す。

東日本大震災から干支がひと回りする中で、各組織におけるボランティア活動が広がる一方、東日本大震災のことを知らないという世代が増えつつある。自然災害は繰り返す。次への備えとして、支え合い・助け合いの意義を含め、災害に対する取り組みの記憶と経験の継承に心がけたい。